

諫曉八幡抄 (正直の人)

八幡の御誓願に云はく「正直の人の頂を以て栖と為し、諂曲の人の心を以て亭らず」等云。夫月は清水に影をやどす、濁水にすむ事なし。

中国の孔子の言葉に「七星頂にあれば隠れて犯し用ゆるなかれ」と、ありますが、これは「七つの星はいつも人の上を照している、どんなにかくれて罪を犯したつもりでも、星は全てを知っているのだから、嘘をついても必ず知れるのである。それ故、正直でなければならぬ」という意味であります。よく世間でも「正直者の頭に神宿る」「正直は一生の宝」という言葉が使われています。この「正直」という意味は「自己の心にいつわりのないこと。正しくすなおなこと。かげひなたのないこと」等々の意味があります。しかし、仏法で言う「正直」とは、さらに深い意義があるのであります。即ち「正直」の「正」とは「邪」に対し、「直」とは「曲」に対する語で、「正しく虚妄でない、真実最高の義」という意味なのであります。また、「虚偽なく真剣に、一生懸命に」という意味も含まれています。

さて、一般に「正直」とは「自己の心を偽らない」という意味に用いられています。しかし、この自己の心もそれ自体としては真実であります。自己の心が誤りを犯す場合も多々見受けられるのです。それ故、誤りを犯している自己に対しては正直であつても、真実に対しては不正直となつてしまうことになるのでありますから、それ故、「正直」とは、こうした誤りの多い自己の心に対してではなく、「真実」そのものや「真実の教え」に対して誠実であることを「正直」と云うのです。つまり、仏法で説く「正直」とは、こうした誤りの多い自己の心に対してではなく、あくまでも真つ直ぐ正しい心を持つて、正しい仏法の教えは正しいと信じ、誤つた教えは誤つているとして捨てること、そして正法を持つた正直な生き方をする人、真つ直ぐで正しい心をもつた人、そのような人の頂に諸天善神が守護の働きを顕すというのが「正直の頭に神やどる」という考え方があります。「正直の人の頂を以て栖とする」という八幡の誓願の本意も、ここにあることは言うまでもありません。

また、この正直には二つの義があることを大聖人は「諫曉八幡抄(一五四二頁)」に於いて述べられています。それは、第一に「世間法上における正直」と、「出世間法(仏法)上における正直」の二種があると申されているのです。

第一に先ず「世間の正直」について、「王と申すは天・人・地の三を串くを王と名づく。天・人・地の三は横なり。たつてんは縦なり。王と申すは黄帝、中央の名なり。天の主・人の主・地の主を王と申す。隱岐の法皇は名は国王、身は妄語の人、横人なり。権の大夫殿は名は臣下、身は大王、夫妄語の人、八幡大菩薩の願ひ給ふ頂なり。」とあります。これは「王」の文字の謂れを明かされて、正直の意義について明かされているのであります。「正法念処經・卷二十善業道品」には「十善道(十善戒)をたもつ者は、

天界に生じては梵天・帝釈等となり、人界に生じては転輪聖王となる等」と説かれています。この十善道の中には不妄語が含まれていることから、不妄語戒（嘘をつかないこと）の福徳を積んだ者が王と生れることが述べられています。そこで、さらに「王」の文字の意義について大聖人の仰せを拝しますと、「王」の字は「天・人・地」の「三」を串くという字義であり、「天・人・地」の「三」は「横」、それを貫いている立つ点（線）は「縦」である。つまり、「天・人・地」の「三」を一貫（初めから終わりまで方法や考えを曲げずに通すこと）する「正直の人」を「王」というと申されています。また「王」は「黄帝・中央の名」であると言われているのは、中国の古義では五色（木_青、火_赤、土_黄、金_白、水_黒）を五方に配するとき、黄色は中央に位置し、各方位を主宰する（中心となつて会合や行事などを行うこと）ところから「帝」とされている。したがつて「王」とは「天の主・人の主・地の主」と定義されているのです。ここに「隱岐の法皇（後鳥羽上皇）は「名は国王」でも「身は妄語の人」であり横人（正直を一心に貫かない人、よこしまな人）であつたと仰せられているのは、後鳥羽上皇が策を弄し、人を欺くことが多かつたことを申されているのです。それに対して、北条義時は「名は臣下」でも「身は大王」「不妄語の人」であつた、仰せられているのです。それ故「八幡が栖としたいと望んだ頂であつた」と申されているのです。

次に、第二には、「出世間（仏法上）の正直」について「出世の正直と申すは爾前・七宗等の経論釈は妄語・法華経・天台宗は正直の経釈なり、本地は不妄語の経の釈迦仏・迹には不妄語の八幡大菩薩なり」とありますが、即ち、仏法上の「正直」とは「法華経」のことであり、その法華経によつて立てられた宗（天台宗）である、と申され、しかも、八幡の本地は不妄語の経（法華経）を説いた釈迦仏であり、その釈迦仏の垂迹が八幡大菩薩として日本国に生まれ、「正直の頂」に栖むことを明かされているのです。しかし、ここで「法華経・天台宗は正直の経釈なり」と仰せられているのは、当時の天台宗は真言密教に墮して、もはや「正直の宗」とは言えなくなっていました。開祖伝教大師が法華経を依経としていたことから、その本来の原点に立ち戻つて「正直の経釈」と仰せになつたと拝されます。このように世間においても不妄語を正直と定め、仏法出世間の立場でも不妄語経である法華経を持つことを「正直」といい、爾前の諸経は妄語であつて、これを持つ者を不正直というと申されているのです。

さて、御義口伝（一七三二頁）に「文句の四に云く……五乗は是曲にして直に非ず。通別は偏傍にして正に非ず。今皆彼の偏曲を捨て、但正直に一道を説くなり」と。御義口伝に云はく……「正直とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり。さて一道とは南無妙法蓮華経なり。今末法にして正直の一道を弘むる者は日蓮等の類に非ずや。」とあります。通釈しますと、「人、天、声聞、縁覚、菩薩の五乗の教えは（爾前経）の教えは、仏の本意でない曲つた教えであつて正直な教えではありません。また通教、別教の二教も円融円満の悟りを説いていない偏つた教えであつて正ではない。今、すべて、この五乗、或いは

通別の偏った教えを捨てて、但正直の一仏乗の円教（法華經）を説くのである。乃至、正直とは、煩惱即菩提、生死即涅槃と開いてゆく教えのことである。即ち、低級な教えを捨てて、正直に本門戒壇の大御本尊を信ずることによって、煩惱（迷いの不孝な境界）はそのまま菩提（悟りの幸せな境界）になり実生活の上に幸福境界を得ることが出来るということである。その正直な教えとは、日蓮大聖人の教法のことで、又、その正直の一道とは、文底下種の南無妙法蓮華經のことである。正直の法である日蓮大聖人の仏法を弘通してゆくのは日蓮大聖人及び、その弟子檀那ではないか」という意味であります。

それ故、大聖人の仏法を信心いたす者は、我が身、我が家、我が住む地上の幸せを願うことです。そして、究極の目的は「広宣流布」であります。広宣流布、あらゆる人々の絶対の幸せを念じてこそ、はじめて真の成仏があります。ここに至って、はじめて大聖人様は、「法華の行人」である、「日蓮が弟子檀那」であると、仰せであります。この折伏なくして、我々は「法華講衆」とも「日蓮が弟子檀那」とも名乗れないと考えなければならぬのであります。諸法実相抄（六六八頁）に『行学の二道をはげみ候べし。行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ。行学は信心よりをこるべく候』とありますが、この「行」というのは「題目の行」であり、「折伏の行」であり、「幸せをつくる下種の行」であります。その信心が、我が身にしみ出て、人々に下種し、その下種が折伏につながっていくのであります。日頃から我が身の行いを深く考えていくことが大切です。下種をする心のない人には折伏は出来ません。朝から晩までお経をあげ、お題目を唱えて、どんなにお経が上手になっても広宣流布は出来ません。本当の功德を受けるには、先ず私たちが「下種・折伏」に心をおき、「行動」をすることです。ただ「口に唱え、心に念じ、体にあらわれない下種、折伏は、大聖人様の教えの信心ではない」と心得られていかなくはなりません。「お題目を唱えるということとは、下種をすること」であり、下種とは折伏のことでありますから、折伏までいかなければ「真の唱題の行」とは言えないのであります。

寂日房御書（一三九四頁）に『かゝる者の弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思ひて、日蓮と同じく法華經を弘むべきなり。法華經の行者といはれぬる事不祥なり。まぬかれがたき身なり。』とありますが、これを通釈いたしますと、「かゝる者」とは、大聖人が地涌の菩薩の上首・上行菩薩の再誕であり、内証の辺においては久遠元初の自受用報身如来であるということであります。「弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思ひて」とは、その日蓮大聖人様の弟子となつて、檀那となる人びとの宿縁は誠に深いのです。即ち、仏法の師弟の關係は、今世だけのものではなく、久遠の昔より未来永遠にわたるのです。しかるに地涌の菩薩の上首・上行菩薩の眷属として、末法に法華經を弘通するという使命を誓い付嘱を受けているのであるのだという、深い宿縁を自覚して、不退の精神で日蓮（大聖人）と同じように妙法の教えを弘通していきなさい。つまり、折伏をしなくてはならない、ということす。又、ここで「日蓮と同じく」とは、いかなる大難に

遇おうとも一歩も退かず、妙法弘通に生涯を貫いていきなさい、ということですよ。

「法華經の行者といはれぬる事不祥なり。まぬかれがたき身なり。」とは、法華經の行者と言われて、妙法流布に生きる人生は、無上の名譽だと思つて、いかなる難とも敢然かんぜんと闘たたかつていかなければならないのである。という意味です。本当に在り難いお言葉ではないでしょうか。

このように妙法弘通に生きる人のことを仏法では「正直の人」というのであります。秋元殿御返事(三三四頁)に『法華經の行者をば一切の諸天、不退に守護すべき經文分明なり。經の第五に云はく「諸天昼夜に常に法の為の故に之を衛護す」』云云。とありますが、法華經の行者をあらゆる諸天善神が昼夜にわたつて守護してくれるんだ、「よし、自分は命懸けで一生をこの信仰に励んでゆくぞ」と、このように覚悟の心をもつて今後とも精進していつていただきたいと思ひます。以上。

(令和四年十一月一日・お経日の砌)